

コロナ「終わりが視野」論文に反論？

テドロス氏発言、WHO批判念頭か

新型コロナウイルス感染症の世界的大流行（パンデミック）について、世界保健機関（WHO）のテドロス事務局長は9月14日（現地時間）の記者会見で、「終わりが視野に入ってきた」と発言した。人々が期待するコロナ終息という「光」は見えてきたのだろうか。専門家は、テドロス氏の発言の背景に、ある一本の論文があると指摘する。



9月14日、記者会見に臨むWHOのテドロス事務局長—WHOのホームページより

「パンデミックを終わらせるのに、これほど優位な状況になったことはない」。14日の会見の冒頭、テドロス氏は直近1週間の新型コロナウイルスの死者数が流行初期の2020年3月以来の低水準になったとした上で、こう述べた。終息に向かう光明に思えた「終わりが視野」発言だが、さらに続きがある。

対策は従来通り

発言の後半でテドロス氏は、ワクチン接種の推進、感染状況の監視と検査、治療体制の整備と維持のほか、政策を丁寧に説明するコミュニケーションの重要性など6点を必要な対策として挙げた。これらは国内でも既に現時点で実施されている対策だ。

それにしても、なぜこのタイミングで「終わりが視野」と発言したのか。感染症に詳しい東京医科大学の濱田篤郎・特任教授は「伝えたいメッセージは、後半の六つの対策の徹底であって、終わりに近づいた過程の重要性を伝えなかったのではないかと推測する。そのうえで「終わりが視野」という踏み込んだ前半の発言の背景に、英医学誌

「ランセット」の記事が念頭にあった可能性を指摘する。ランセットは14日付で世界のコロナ対策を批判する論文を公表した。28人の専門家による委員会がまとめたこの論文では、これまでの世界のコロナ対策を「a massive global failure at multiple levels（複数のレベルでの大規模な世界的失敗）」と表現した。

具体的な問題点として、新型コロナウイルス感染症初期発生時のタイムリーな通知の欠如▽エアロゾル感染で広がることを認めず、適切な公衆衛生緩和策の実施が遅れた—など10項目を挙げた。名指しこそしていないものの、WHOのリーダーシップと各国政府の初動の不手際を指摘する内容だった。

濱田さんは「テドロス事務局長の頭にはランセットの記事があったのだろう。だから、それに対する反論を込めて『これまで対策を取ってきたから、終わりが視野に入ってきた』と述べたかったのではないかと推測する。『終わりが視野に入ってきた』と述べたわけではない。実際にパンデミックが終わりに近づいたわけではないだろう」と話す。

国内でも第7波と呼ばれた感染拡大は収まりつつあるが、過去2年とも正月休み明

けに感染が拡大した経験を踏まえ、来年の正月休み明けの感染拡大に備えて、4回目のワクチン接種が呼び掛けられている。従来通りの感染対策が引き続き必要である点は変わらないようだ。

終息議論の時期に

新型コロナウイルスのパンデミックに今後どう向き合えばよいのか。長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授は「状況を見れば、コロナが完全に排除された『コロナゼロ』はあり得ない。常にコロナがある環境を認めた上で、社会がいつまで非常事態で進むのかという線引きが問題になる」と指摘する。

終息についての明確な基準はないが、山本さんは「誰かが『もう終わりにしよう』と言わなければ、終わりはない。欧州や米国には『そろそろ元に戻したい』という考えがあり、テドロス氏の発言はそのプロセスの一つ。こういう発言が出たり、それへの批判があったりしながら、全体が『終わったのかな』という状態に向かっていくのだろう」と話す。

山本さんは、最近の重症化

率の低下やワクチン接種の普及といった状況から「終息について議論する時期にきている」と話す。「どこで線引きするかは、科学の話ではない。重要なのは、我々はどういう社会でありたいか、という点だ」と強調する。

新型コロナウイルス対策をいかに終わらせるか、という「出口戦略」に関する議論は、9月14日の厚生労働省のアドバイザリーボードでも話題に上った。国立感染症研究所の脇田隆字所長ら5人の研究者が「パンデミックの出口戦略における抗ウイルス薬の役割」と題する意見書を提出した。意見書では、「インフルエンザなど過去にパンデミックを引き起こしたウイルスは自然に感染したり、ワクチンが普及したりして集団免疫を獲得することで、一般的なウイルスに変化するという経過をたどった」として、「新型コロナウイルスも長期的には同様の経過をたどるだろう」と指摘した。

塩野義製薬は28日、抗ウイルス薬「ゾコーバ」の最終段階（第3相）の治験で早期に症状を消失させる効果が確認されたとする速報を発表した。ゾコーバは7月、いち早く実用化を目指して国の審議会で「緊急承認」が議論されたが、「効能・効果に対する有効性は推定できない」として審議継続となっていた。

濱田さんは「インフルエンザも昔から存在し、人間と共存する呼吸器感染症になった。新型コロナウイルスもまだ数年間、流行の波を繰り返しながら、どこかで対策の終わりを考えることになるだろう」と話す。